

主日礼拝説教「憐れみの連鎖反応」 予稿

日本基督教団石神井教会 2025年9月28日

【旧約聖書日課】創世記 45章1～8節

¹ヨセフは、そばで仕えている者の前で、もはや平静を装っていることができなくなり、「みんな、ここから出て行ってくれ」と叫んだ。だれもそばにいらなくなってから、ヨセフは兄弟たちに自分の身を明かした。²ヨセフは、声をあげて泣いたので、エジプト人はそれを聞き、ファラオの宮廷にも伝わった。

³ヨセフは、兄弟たちに言った。「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。」兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった。

⁴ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか、もっと近寄ってください。」兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。

「わたしはあなたがエジプトへ売った弟のヨセフです。⁵しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。⁶この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。⁷神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。⁸わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。」

【使徒書日課】ヤコブの手紙 2章8～13節

⁸もしあなたがたが、聖書に従って、「隣人を自分のように愛しなさい」という最も尊い律法を実行しているのなら、それは結構なことです。⁹しかし、人を分け隔てするなら、あなたがたは罪を犯すことになり、律法によって違反者と断定されます。¹⁰律法全体を守ったとしても、一つの点でおちどがあるなら、すべての点について有罪となるからです。¹¹「姦淫するな」と言われた方は、「殺すな」とも言われました。そこで、たとえ姦淫はしなくても、人殺しをすれば、あなたは律法の違反者になるのです。¹²自由をもたらず律法によっていずれは裁かれる者として、語り、またふるまいなさい。¹³人に憐れみをかけない者には、憐れみのない裁きが下されます。憐れみは裁きに打ち勝つのです。

【福音書日課】マタイによる福音書 18章21～35節

²¹そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」²²イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。²³そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。²⁴決済始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。²⁵しかし、

返済できなかったのも、主君はこの家来に、自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。²⁶家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。²⁷その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。²⁸ところが、この家来は外に出て、自分に百デナリオンの借金をしている仲間に出会うと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。²⁹仲間はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼んだ。³⁰しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金を返すまでと牢に入れた。³¹仲間たちは、事の次第を見て非常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。³²そこで、主君はその家来を呼びつけて言った。『不届きな家来だ。お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。³³わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか。』³⁴そして、主君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に引き渡した。³⁵あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さないなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであろう。』

何回赦す？【こども説教のために】

日曜日の教会へと集められて来たわたしたちは、礼拝の中で必ず「主の祈り」を共に唱えます。「主の祈り」は、「あなたがたが祈るときは…こう祈りなさい」（マタイ 6:7~9）と言って主イエスがお教えくださった祈りの言葉です。わたしたちが共に祈るとき、他の言葉ではなく、何よりも「主の祈り」を唱えることを大切にしているのです。

「主の祈り」は、ほとんどが「天の父」がわたしたちのためにして下さることを待ち望む祈りです。その中で一つ、わたしたち自身が為すべきことができるようにと決心する祈りがあります。「わたしたちも人をゆるします」（教会共通口語訳）という祈りです。「天の父」が「わたしたちの罪をおゆるしてください」ますから、「わたしたちも人をゆるします」と祈るのです。

主イエスは、わたしたちに最も必要なことは人の罪を赦すことだとお考えでした。弟子たちの教会は、そのことを最も大切にしないといけないとお教えになりました。弟子のペトロが「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか」と問うたとき、主イエスは、「七回どころか七の七十倍までも赦しなさい」とおっしゃいました。どこまでも赦しなさい、とおっしゃったのです。

それは難しいことのように思えます。一回でも赦せないと思うことさえあるのですから。けれども、主イエスはおっしゃるのです、「天の父が、あなたのことをどれほどお赦しくださっているか、思い出しなさい」と。わたしたちは皆、自分では償いきれないほどの罪を、天の御父にお赦しいただいているのです。天の御父の御名で赦してもらっているのです。そうであれば、わたしたちは、互いに赦し合わないでいるわけにはいかないのです。

赦しなさい

二週間ほど前、米国で若い政治活動家が大学生を集めた集会中に銃撃され、殺されたというニュースが、日本でも報道されました。直前に来日してある日本の政党の集会に参加していたことから少し話題になりましたが、日本の報道は別の話題がもっぱらで、続報はあまり無かったようです。しかし、米国では、大統領をはじめとする著名人が声明を発表したり、大きな追悼集会に参列したりと、余波は続いているようです。

その活動家のキリスト教福音派を背景とする主張に対しては、米国内でも激しく賛否が割れているようです。同じキリスト教徒でも、リベラル色の強い人々とは相容れないところがあったと思われます。わたしたちの教会の中でも、その主張の賛否が問われれば、意見は割れると思います。その主張について、わたしは論評する立場にはありませんし、賛否を明らかにする必要もないでしょう。

ただ、一つのことにわたしは注目しないではいられなくなりました。殺された活動家の妻である方が、追悼集会の中で、「わたしは、犯人を赦す」と述べたと報じられたことです。自身も活動家として夫と行動を共にしていた女性です。おそらく今後も夫の遺志を継いで活動家としての働きを続けていくのでしょう。その彼女が、自分の夫を殺した犯人を「赦す」と宣言したことの意味を、わたしは、ずっと考え続けています。

米国で古風な生活を維持し続けている「アーミッシュ」と呼ばれるキリスト教徒の共同体が、各地にあります。彼らは、それぞれの地域の共同体で独立性が高いのですが、共通した特色もあります。特に彼らの特徴としてしばしば取り上げられるのは、彼らが人を「赦す」ことに徹している点かもしれません。主イエスが「赦しなさい」と教えられたことを、どこまでも徹底して実践しようとしている、というのです。20年程前、ある町でアーミッシュの学校に銃を持った者が侵入し、5人の子どもを殺害するという事件がありました。犯人は、同じ町に住むアーミッシュではない若者でした。そのとき、彼らは、自分たちの子どもたちが殺されたにもかかわらず、「犯人を赦す」と言って、殺人犯の葬儀にまで参列したというのです。

このような行動を取る者が、米国のキリスト教徒の中にはときどき現れます。主イエスが「赦しなさい」とお教えになられているからです。いつも、「わたしたちも人をゆるします」と祈っているからです。

わたしは、正直に言えば、自分がそのような立場に置かれたときに同じように行動できるか、わかりません。表向き「赦す」と言うことができても、本心から赦すことができるだろうかと思うのです。あるいは、主イエスに命じられているのですから、無理してでもそうすべきなのでしょうか。

憐れみ

ペトロが主イエスに「**兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか**」と問うたのは、主イエスご自身が「**兄弟があなたに対して罪を犯したなら…**」（マタイ 18:15）とお教えになられた時のことでした。そのとき主イエスは、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」（同 20 節）と締めくくられていました。弟子たちの教会が罪を犯した者を赦すことのできる交わりになれるようにと、「あなたがたがたとえ少数でいるときにも、わたしがそこに共にいることを思い出してほしい」とおっしゃられたのです。ご自身の存在を思い起こさせることで、罪を犯した者を赦し合える関係を保たせようとお考えになられたのかもしれません。

いったい、主イエスご自身は、「七の七十倍までも赦す」というような大きな憐れみの心を、どのようにして知るようになったのでしょうか。それが「天の御父」の御心だと知るようになるきっかけがあったのではないのでしょうか。わたしは、もしかするとそれは、主イエスを養い育てた父親ヨセフとの関係の中で養われた憐れみの心だったのではないかと想像することがあります。母マリアとは違って、父ヨセフと主イエスの関係は、ほとんど何も伝えられていません。早くに亡くなっていたとする説もありますが、主イエスには少なくとも四人の弟と複数の妹がいたと伝えられていますから、幼少期に母子家庭だったわけではないでしょう。

主イエスの父親の名は、族長ヤコブの息子の一人の名から取られたものです。十二人兄弟の十一番目の息子ヨセフです。年寄り子として生まれたヨセフは、父ヤコブから溺愛されて兄たちから嫉妬され、エジプトに奴隷として売られました。しかし、エジプトでファラオに見出されたヨセフは、飢饉の中、食糧を買いに来た兄たち、そして父ヤコブの一族を、エジプトに呼び寄せたのです。兄たちの罪をもはや問うことなく、それは神のご計画の中で用いられたことなのだと、ヨセフは兄たちに宣言しています。そのような言葉を発することができるのは、今の彼が成功しているからでしょうか。それだけでなく、彼が幼少時代、父親の無制限の愛に包まれる経験をしていたからこそ、なのではないでしょうか。

憐れみに溢れ、愛に満ちた方と共にいることなしには、わたしたちが憐れみに生きることも、愛の実践に生きることも、難しいのでしょうか。けれども、わたしたちは、主イエスが共にいてくださることを知っています。主イエスと一つにされて生きることを学んだ弟子たちの教会に連なる者とされています。ここに、主イエスはいらっしゃる。限りない憐れみをもってわたしたちをお赦しくださる御父の御心を受け継ぐ主の御体が、ここにはあるのです。